

ゴルギアスはソフィストか？

木下 昌巳

Masami KINOSHITA

紀元前5世紀後半から4世紀の前半にかけて活動した「ソフィスト (σοφιστής)」と呼ばれる人物として、今日 10 人前後の名が知られているが、そのなかでもゴルギアスは一般にプロタゴラスと並ぶ代表的なソフィストと見なされている。しかし、過去において何人かの著名な論者がこのようなゴルギアス観に疑義を呈してきた¹⁾。そのなかで、もっとも影響力があると思われるのは、Dodds の見解であると思われる²⁾。彼は、プラトンの『ゴルギアス』の注釈のなかで、ゴルギアスはソフィストではなく「弁論家 (ῥήτωρ)」と呼ばれるべき者であって、プロタゴラス、ヒッピアス、プロディコスなどの者たちとは別な種類の間人であると考えるべきだと主張した。これにたいして、Harrison は、とくにゴルギアスがほかのソフィストたちから区別されなければならない理由は存在しないとして、伝統的なゴルギアス観を擁護した³⁾。はたして、ゴルギアスはソフィストなのか。

この問題に答えるには、ソフィストという概念を明確に定義したうえで、ゴルギアスという人物がそれに当てはまるか否かを調べるという手続きが予想される。しかし、この作業はそれほど単純ではない。というのは、「ソフィストとは何であったか」ということがすでに簡単な問題ではないからである。われわれが一般に抱いているソフィストのイメージは、近年までプラトンの著作から得られるソフィスト像に支配されてきたと言ってよい。しかし、プラトンの提

¹⁾ Grote[2], 521: “if the line could be clearly drawn between rhetors and sophists, Gorgias ought rather to be ranked with the former.”; cf. Pohlenz, 200; Raeder, 11.

²⁾ Dodds, 6–9: “it is doubtful whether he should in fact be called a ‘sophist’ at all, in the specific sense in which historians of philosophy use the term.” (6); “What, then, was Gorgias? If we can believe Plato, the answer is clear: he was simply δεινὸς λέγειν, a man who could alter the appearance of things διὰ λόγου, and whose only profession was to make others δεινοῦς λέγειν.” (8). Dodds 以降、彼の立場に従う者として Robinson がいる (Robinson, 49–50)。

³⁾ Harrison, 27–39. Harrison 以降、彼の立場に従う者として、たとえば、Guthrie と Kerferd がいる (Guthrie[1], 36 n.4; Kerferd, 45)。

示するソフィストの像は、Grote がその公正さに疑問を投じて以来、それがそのまま受け入れられることはなくなっている⁴⁾。いまここで確認しておくべきことは、プラトンの時代においてソフィストという語の意味はけっして確定したのではなく、いまだ流動的なものであったということである。プラトンの時代には、それぞれの立場の者が独自のソフィストの概念をもち、それにしたがって自分がそう思う人間をソフィストと呼んでいたという傾向がある。たとえば、プラトンとイソクラテスは、双方が自らを「哲学者(φιλόσοφος)」と称して、他方にたいして「ソフィスト(σοφιστής)」というレッテルを貼ろうとした⁵⁾。また、アリストパネスの喜劇からも知られるように、ソクラテスという人物も当時の多くの人々の目には、代表的なソフィストとして映っていたのである⁶⁾。それゆえ、ある人物がソフィストであるのかという問題を考えるさいには、それが誰の視点からの判断であるのかをつねに意識しておく必要がある。「ゴルギアスはソフィストであるのか」ということも、ある誰かがゴルギアスをソフィストと見なしていたか否かというかたちでしか答えることができない問題である。Dodds がゴルギアスをソフィストではないと考えるその根拠は、すべてプラトンの対話篇によるものである。われわれがそこから知ることのできるのは、何よりもプラトンのゴルギアス観、プラトンはゴルギアスをソフィストと見なしていたか否かということである。しかし、プラトンの著作から知ることのできるのはこのことにとどまらない。プラトンの対話篇は一般に歴史的事実に忠実であることが知られている。『ゴルギアス』のなかでゴルギアス自身が登場人物の一人として語っていること、さらにその他の対話篇においてもゴルギアスについて言及されていることから、そこに歴史的ゴルギアスの思想や態度を読み取ることができるだろう。以下の議論では、まず第一に、Dodds が、ゴルギアスはソフィストではないことを示唆しているとして指摘した記述を検討して、プラトンにとってゴルギアスがほかのソフィストたちから別の種類の人間として決定的に区別されるべき者ではなかったことを、Harrison とは違った仕方でしめすことを試みる。この問題は、Harrison も言うように、たんなる言葉の問題にとどまるものではない。プラトンの『ゴルギアス』という対話篇全体の意図をどう捉えるかということとかかわってくる⁷⁾。もしプラトンがゴ

⁴⁾ Grote[1], vol.8, ch.67.

⁵⁾ Sidgwick, 291-4. 以下にこの稿で論ずるプラトンの『ゴルギアス』という対話篇も、このようなプラトンとイソクラテスの対立を背景としたものと考えられる。その実質的な議論は、ソクラテスの弟子であるカイレボンと『ゴルギアス』の弟子であるポロスの問題提起によって始められている。この二人が、ソクラテスの弟子であるプラトンと『ゴルギアス』の流れを汲むイソクラテスの代理的な性格を持つことは容易に見て取ることができる。Cf. Guthrie[2], 308-11.

⁶⁾ Kerferd, 55-57.

⁷⁾ Harrison, 183.

ルギアスをソフィストと見なしていないとするならば、この対話篇はソフィストという職業一般を問題にしたものではなく、ゴルギアス個人を批判の対象としていると考えなければならないことになるだろう⁸⁾。さらにこの小論の第二の意図として、ゴルギアスが「弁論家」と名乗ったことの意味を検討して、プラトンの視点から独立した歴史的ゴルギアスの自己認識のあり方をあきらかにしたい。

プラトンは、いくつかの箇所では疑いなくゴルギアスをソフィストとして扱っている⁹⁾。『ソクラテスの弁明』において、その教育にたいして報酬を要求する者として、ヒippiアス、プロディコスと並べてゴルギアスの名が挙げられている。ここでプラトンは、ゴルギアスをほかの二人の者と同じ種類の人間、すなわちソフィストとして考えているように見える。さらに『ヒippiアス（大）』では、政治と金銭に縁のなかったピタコス、ビアス、タレスらの「昔の賢者」にたいして、その両方の点で成功した者として、ヒippiアス、プロディコス、プロタゴラスらの名とともに、ゴルギアスの名を語っている (*Hipp. Major* 281b)。とくにここでは、ゴルギアスは端的に「ソフィストであるレオンティノーノイの人ゴルギアス」と呼ばれている (282b)。すくなくとも、これらの箇所を見るかぎり、プラトンがゴルギアスをほかのソフィストたちと別の種類の人間として考えているとは思われない。しかし、プラトンの作品のなかには、別のいくつかの箇所において、ゴルギアスがソフィストではないことを示唆していると思われる記述が存在する。Dodds がゴルギアスはソフィストではないと結論づけるのは、これらの記述を重視するがゆえにである¹⁰⁾。彼が、その根拠として指摘しているのは、次の四つのことからである。

- (1) 「徳を教える」ということはソフィストの基本的な機能であると考えられるが、『メノン』のなかでゴルギアスはこのようなことをおこなわないと宣言していると報告されている (*Men.*95b)。
- (2) 『ゴルギアス』において、ゴルギアスは自分のことを「弁論家」と規定している (*Grg.*449a)。そのあとで弁論家の技術がソフィストの技術とは別なものとして提示されていることは、ゴルギアスがソフィストではないことを意味していると考えられる (*Grg.*465c)。
- (3) ゴルギアスを積極的に評価しているはずのカリクレスが、ゴルギアスの面前でソフィストのことを「価値のない者ども」と罵倒している (*Grg.*519e)。

⁸⁾ Dodds, 367: "Plato may well have believed that in fact the 'neutral' education which derived from Gorgias had done more harm than all the teaching of the sophists."

⁹⁾ プラトンがゴルギアスをソフィストとして扱っている記述については、cf. Harrison, 184-185.

¹⁰⁾ Dodds, 8.

- (4) 『プロタゴラス』冒頭でのソフィストたちの‘Great Congress’にゴルギアスが登場しない (*Prt.*314e–316a)。

わたしは、この四つの記述はどれも、プラトンがゴルギアスをソフィストと見なしていないことをしめしているとは考えない。以下、I 章と II 章でそれぞれ (1) と (2) の記述を検討し、その意味するところをあきらかにしたい。そして III 章でゴルギアスが自分を「弁論家」と名乗ったことの意味を考察し、それとの関連において (3) と (4) の記述に触れることにする。

I 「徳を教える」ということ

『メノン』のなかで、ゴルギアスにかんして以下のようなことが報告されている。

ソクラテス「ではどうだろう。徳の教師であることを公言している唯一の者であるソフィストたちは、実際にそのような者であるときみには思われるかね」

メノン「ソクラテス、わたしがゴルギアスに感心するのはとくにその点なのですが、あなたはそんな約束を彼の口から聞くことはけっしてないでしょう。のみならず、あの人はほかの者たちがそんなことを約束するのを聞くと、笑っています。彼が自分の仕事として考えているのは、ただ人を弁論に秀でた者にするということだけなのです」 (*Men.*95b–c)

徳を教授すると主張することは、ソフィストたち一般に広く認められる特徴であると考えられている¹¹⁾。プラトンは、この主張を、プロタゴラスなどの特定の個人に帰せられるものではなく、ソフィストたち共通の公約として提示している¹²⁾。ゴルギアスが徳を教えることを否定していたのが事実であるならば、このことはゴルギアスがソフィストとは別の種類の人間であることを強く示唆しているように見えるかもしれない。¹³⁾

¹¹⁾ Dodds, 7: “Gorgias had certain external characteristics in common with early sophists — the itinerant life, the epideictic method, the shocking practice of teaching for pay — but he disowned what is perhaps *their most distinctive common feature*, the claim to be able to ‘teach arete’.” (イタリックは木下による); Guthrie[1], 38ff.: “All save Gorgias would admit to being teachers of arete.” (44)

¹²⁾ *Men.*91b, 95b; *Hipp. Major* 283c; *Soph.*223a. エウテュデモスのようなソフィストは、プロタゴラスに代表される第一世代のソフィストとはその性格において大きな隔たりがあるにもかかわらず、彼もまた徳の教師と称していたことは注目に値する (cf. *Euthyd.*283c). Cf. Harrison, 189 n.34.

¹³⁾ Grote や Pohlenz がゴルギアスがソフィストであることを否定したのは、ゴルギアスのこの主張を重視したことによる。脚註 1 参照。

しかし問題は、このゴルギアスの主張が彼の教育活動をほかのソフィストたちのそれから切り離すような、いかなる内実をもっていたかである。プロタゴラスは、自ら徳の教師であることを名乗った最初のソフィストとされるが、彼は自分が弟子たちに教授することの具体的内容を説明して、「身内のことがらについてはもっともよく自分の一家を整える道を計り、さらに国家公共のことがらについてはこれをおこなうにも論じるにももっとも有力有能な者となるべき道を計ることの上手となる」ことであると述べている (*Prt.*318e-319e)。また、ヒippiasは、立派で大きな価値のあることは「法廷や議会や論議がそこでおこなわれるその他の公共機関で、立派によく言論を駆使することによって、聴衆を説得して、自分自身や自分の財産や友人の安全という、褒美のなかでも最小ならぬ最大のものをもって引き上げること」であると言っている (*Hipp. Major* 304a-b)。『メノン』と『国家』においても、これと同じ内容のことがソフィストたち一般の公約することがらとして語られている (*Men.*91b; *Resp.*600c-d)。つまり、ソフィストが教授することを約束していた徳とは、言論の技術によって社会的・政治的な成功を保証する能力であると言うことができる¹⁴⁾。では、問題のゴルギアスは、弟子たちにどのようなことを教えると主張していたのだろうか。彼は、彼が教えると言う弁論術とはどのような技術であるのかとたずねられて、それは「すべての人には自由を、個々人には自国における他人にたいする支配」をもたらすものであると答え (*Grg.*451d-452d; cf. *Phlb.*58a)、それをさらに「法廷では裁判官たちを、政務審議会ではその議員たちを、民会ではそこに出席する人たちを、またその他、およそ市民の集会であるかぎりの、どんな集会においてでも、人々を説得する能力」と説明している (*Grg.*452e)。つまり、ゴルギアスが彼の教育によって実現しようとする最終的な目標は、ほかのソフィストたちが約束していることとその内容において違いのないものであることがわかる¹⁵⁾。だとすれば、もしほかのソフィストが徳の教師であるならば、ゴルギアスも同じ意味において徳の教師であると言うことができるだろう¹⁶⁾。

¹⁴⁾ Cf. Jaeger, 289-90; 田中, 第6章; Irwin, 116. さらに次註の Harrison の引用参照。

¹⁵⁾ Harrison, 188: "when the sophists claimed to impart arete, they meant primarily by that term political ability based on oratory: and there is nothing to send Gorgias' claim in this field apart from those of other members of the sophistic profession."; 田中, 115: 「ゴルギアスの約束が、その実際の内容において、人間として、また国家社会の一員として優れた者をつくる徳の伝授であることは明らかである。」

¹⁶⁾ ゴルギアスもこのような能力を徳として捉えていたことが『メノン』のなかで示唆されている。「きみとゴルギアスは徳とは何であると考えるのかね」とたずねられて、メノンは、ゴルギアスの意見を代わって述べるというかたちで (cf. 71c-d), 「人々を支配する能力にほかありません」と答えている (73c)。彼の教授することの内容は、ゴルギアス自身の考えに照らしても、徳と呼ばれるべきものにほかならない。

では、ゴルギアスは徳を教えないという主張によって何を否定しようとしたのだろうか。この主張のなかで言われている徳が何を意味するのかということについて、論者たちの解釈は概ね一致している¹⁷⁾。彼は、『ゴルギアス』のなかで、弁論術を授けられた者がそれを使って不正な行為を働いたとしても、責められるべきはその技術を不正な仕方で実際に使用した者であって、教えた者にはその責任はないと主張している (*Grg.*457a-c)¹⁸⁾。このことから、ゴルギアスが教えることを否定していた徳とは、正義や法を守ることなどの社会的徳であると考えられる。彼がほかのソフィストたちが徳を教授すると公言していることを「笑った」のは、彼らが徳という語の意味の区別に無造作であったために、世間から不必要な批判にさらされているように見えたからであろう。このような事実があったことは、カリクレスとの会話のなかでのソクラテスの発言からも伺われる。ソクラテスは徳を教えると主張している人々を次のように嘲笑している。「ソフィストたちはほかの点については知恵があるが、ある一つの点にかんしてはばかげた行為を犯すという罪を犯している。というのは、彼は徳の教師であると主張しながら、よく彼らは自分が生徒が授業料を払わないとか、彼らから受けた恩恵にたいして感謝を示さないとか自分の生徒を非難する。これほどばかげた主張があろうか。」 (*Grg.*519c) ゴルギアスは、このような矛盾を避けるために、つねづね自らにかんして徳を教授するということを否定していたと想像される¹⁹⁾。つまり、彼はこの主張によって自分がソフィスト的な教育をなすことを否定しようとしているのではないと考えられる。

引用した『メノン』の箇所を見ると、Harrison も指摘するように、メノンもゴルギアスをソフィストと見なしていることがわかる²⁰⁾。ここでは、ソフィストが徳の教師として言及された直後に、それと対比するかたちで、徳を教えることを否定する者としてゴルギアスの名が挙げられている。このことは、彼がソフィストではないという印象を強く与える。しかし、ここでメノンは、ソクラテスの「ソフィストたち」という言葉を受けて、それをゴルギアスと「ほ

¹⁷⁾ Cf. Dodds, 212; Harrison, 189; Irwin, 121-22. 異なった解釈として、cf. Untersteiner, 182; Guthrie[1], 271ff.

¹⁸⁾ このような解釈は、この直後にゴルギアスが正義・不正をも教えると述べていることと矛盾すると思われるかもしれない (459e-460a)。しかし、このゴルギアスの言葉を彼の立場としてそのまま受け取ることはできない。あとでポロスは、ゴルギアスは正義や不正も教えることを認めたのは「弁論術の心得のある者が正しいことも美しいことも善いことも知らないのだと認めることはきまりが悪い」と思っていることであって、それはけっしてゴルギアスの本意ではなかったことをはっきりと指摘している (461b-c, cf. 482c-d)。この点にかんして、ゴルギアスの立場はクリアである。

¹⁹⁾ それにもかかわらず、プラトンは、ソクラテスとの問答においてゴルギアスもまたこのような矛盾に陥る者として描いている。このことは、プラトンにとって、ゴルギアスがまさにソフィスト的人物であることの証左として考えられるかもしれない。

²⁰⁾ Harrison, 188.

かの者たち」に区分しているのである。ここでメノンが述べているのは、ゴルギアスがソフィストではないということではなく、ゴルギアスのソフィストとしての特殊性である²¹⁾。メノンという人物がゴルギアスの弟子筋に当たる者であることは注意してよいかもしれない。このような者にでさえゴルギアスはソフィストとして想起される人物であったのである。ほかの一般の人々にとっては、ゴルギアスの教育のあり方は、ほかのソフィストたちのそれと区別できないものであったにちがいない。

Harrison は、ゴルギアスの徳を教えないという発言を、ソフィスト特有の 'gimmick' (実体の伴わない、たんなる見せかけほどの意) として解釈する²²⁾。ソフィストと呼ばれる人々がお互いに強烈な競争意識をもち、主に商業上の理由で、「虚偽威し」とも言えるような発言をしたり態度をとったりしていたことが知られている。とくにゴルギアスには、このような実体の乏しいと思われる派手な発言や行為が顕著である。たとえば、いかなる質問にもその場で即答すると公言していたこと²³⁾、紫の上着を着ていたこと²⁴⁾、デルポイに自分自身の黄金の像を建立したことなどは²⁵⁾、すべてそのような種類の行為であると見ることができる²⁶⁾。Harrison は、彼の「徳を教えない」という宣言もこれらと同じ外面的な効果だけを狙った性格のものであり、なんら実体の無いものであると捉えようとするのである。Guthrie も、ゴルギアスのこの主張の背後に、徳の教師であることを宣言していたとされるプロタゴラスへの敵対意識が存在することを想定している²⁷⁾。しかし、このゴルギアスの発言の意図を理解するには、時間的に平行なソフィスト同士の競争意識だけではなく、時代的な背景を考慮に入れる必要があると思われる。そのなかでプロタゴラスが自ら徳の教師であることを宣言している『プロタゴラス』の舞台の設定年代は、紀元前 433 年か 432 年であると推定される²⁸⁾。それは、ペロポネソス戦争勃発以前のことであり、アテーナイがペリクレスの指導下の民主制のもとで黄金期を迎えた時期に当たる。そのようなオプティミスティックな状況のもとで、徳を教えるというソフィストのスローガンが熱狂的に受け入れられたことは驚く

²¹⁾ Bluck(206) も次のような註を加えている: "At 95c Meno seems to imply that Gorgias was an (exceptional) Sophist."

²²⁾ Cf. Dodds, 9.

²³⁾ *Grg.* 447c(=DK82A20); *Mén.* 70c.

²⁴⁾ Aelian, *V.H.* 12, 32 (=DK82A9)

²⁵⁾ Pausanias, *X*, 18, 7; Pliny, *N.H.* XXXIII, 83 (=DK82A7).

²⁶⁾ ゴルギアス独特の大げさな文体も、彼のこのような態度の一つの現れと見ることができるかもしれない。

²⁷⁾ Guthrie[1], 271: "Gorgias (no doubt with an eye particularly on Protagoras) disclaimed any intention of teaching arete."

²⁸⁾ Cf. Adam & Adam, xxxiii.

に値しない。それにたいして、ゴルギアスが徳を教えないという主張をしたのは、それよりもかなり年代が下ると考えられる。『ゴルギアス』の設定年代は確定しがたいが、ゴルギアスが初めてアテナイに登場したのは紀元前 427 年のことであるから、紀元前 431 年のペロポネソス戦争勃発以後であることは確実である²⁹⁾。『メノン』の設定年代はさらに下り、ペロポネソス戦争終結後のことであると推定される³⁰⁾。ペリクレスの死後（紀元前 429 年）、戦争の進展に伴い、アテナイは社会的混乱に陥る。劣悪なデマゴーグたちが出現し、民主制は衆愚制へと変化していった。保守的な人々からは、ソフィストたちはこのような混乱の元凶とさえ見なされた。このような状況において、ソフィストの徳を教えるという主張が色褪せたものとなったのは十分に推測することができる。ゴルギアスがカリクレスのようなアモラリズムを積極的に説く人間を身近にもつ者として描かれていることは注目に値する。ゴルギアスにとって、このような時代思潮はすでに親しいものだったのである。彼は、このような時代の雰囲気を感じとり、徳の教師という看板を掲げることにはかえって不利であると判断したのであろう。「徳を教えない」という主張は、時代の要請に即した、いわばゴルギアスの営業政策上の意匠であったと思われる。

II 4つの技術のなかでの「ソフィストの技術」と「弁論術」

ゴルギアスはソフィストではないと Dodds が主張するもう一つの大きな根拠は、ゴルギアスが自分のことを「弁論家 (ῥήτωρ)」と規定していることである。

ソクラテス「いやむしろ、ゴルギアス、あなた自身で言ってください、われわれがあなたのことを何と呼ぶべきか、そしてそれは、どんな技術を心得ている者としてなのかということを」

ゴルギアス「弁論術 (τῆς ῥητορικῆς) だ」

ソクラテス「それでは、あなたのことを『弁論家 (ῥήτωρ)』と呼んだらよいのですね」

ゴルギアス「そうだと、ただそれだけではなく『立派な弁論家』と呼んでくれたまえ」(Grg.449a)

ここで言われている内容は、それだけではゴルギアスがソフィストであることを否定していることにはならない。ある者が「弁論家」でありながら、同時にソフィストであることも可能であるからである。しかし、ゴルギアスが弁論家と名乗っていることと、この後でソクラテスによって語られる四つの技術の關係のシェーマのなかで、ソフィストの技術と弁論家の技術が明確に区別されて

²⁹⁾ 『ゴルギアス』の設定年代については、cf. Dodds, 17-18; Irwin, 109-110.

³⁰⁾ 『メノン』の設定年代については、cf. Taylor, 129-30.

いることを重ねて見るならば、この言明はゴルギアスがソフィストではないことを意味しているように思われる。

ゴルギアスをソフィストであるとする Harrison は、この困難を回避しようとして、ソクラテスが述べている弁論術とソフィストの技術の区別は実体のないものであり、それゆえに、ゴルギアスが自分を弁論家であると言ったとしても、そのことによって彼がソフィストであることが否定されることにはならないと主張する³¹⁾。Harrison は、弁論術とソフィストの技術の区別が実体をもたないことの根拠として、(1) ソフィストや弁論家自身をも含めて誰もこの区別に気がついていないと言われている、(2) 後の議論でこの二つの技術のあいだの区別は打ち消され、一つのものとして扱われている、(3) ソクラテスがポロスにたいして四つの技術の関係を提示したさいに、弁論術とソフィストの技術の差異は明確に説明されていない、という三つの点を指摘している。しかし、Harrison の挙げるこれらの根拠は、どれも同意しがたいものである。

まず(1)にかんして、Harrison の指摘する箇所を以下に引用する。

ソクラテス「きみは、次のことをすでに理解しただろう。つまり、化粧法が体育術にたいする関係はソフィストの技術が立法術にたいする関係に等しく、また料理術が医術にたいする関係は弁論術が司法術にたいする関係に等しいということを。しかしながら、わたしが言ったように、それらには本性上そのような区別があるのだけれど、近い関係にあるがゆえに、ソフィストと弁論家は同じ領域にかかわる者として混同されているのである。そして彼ら自身もお互いに自分たちをどう扱ってよいのかわからないでいるし、またその他の人たちにしても、彼らをどう扱ってよいのかわからないのである」(Grg.465b-c)

Harrison は、「ソフィスト自身や弁論家自身がこの（弁論術とソフィストの技術の）区別を知らなければ、はたして誰がそれを知っているのか？」と言っている³²⁾。しかしここでソクラテスは、あきらかに、その区別を誰も知らないと言っているわけではない。なぜなら、ソクラテス自身はこの区別を明確に知っているのであり、その立場からこのような発言をしているからである。ソクラテスが言っているのは、弁論術とソフィストの技術のあいだには本質的な区別があるのだけれども、自分以外の人にはそれに気がついていないということである。弁論家とソフィストのあいだには、「本性上 (φύσει)」区別があると言われていることに注意しなければならない。つまり、このソクラテスの意図は、二

³¹⁾Harrison, 186-87. 彼は、弁論術とソフィストの技術のあいだの区別が実体のあるものであったとしても、自分の立場は崩れないとするが、この二つの技術は区別されるものではないという解釈をもっとも妥当な解釈として提示している。

³²⁾Harrison, 186.

つの技術の区別を打ち消すことではなく、この二つの技術を混同している一般の人々の誤りを指摘することにある。

Harrison が挙げる第二の根拠は、ソフィストの技術と弁論家の技術はあとの議論では一つのものであると扱われているということである。しかし、それもあきらかに誤りである。プラトンは、最後までこの二つの技術を明確に区別すべきものとして扱っている。ふたたび問題の箇所を引用する。

ソクラテス「それでは、あの先の人たち、つまり国家の先頭にたって指導し、国家ができるだけよくなるように配慮しながら、場合によっては逆にその国家をいちばん悪い国だと非難する人たちについては、きみはいったい何と言うだろうか。この人たちは、あのさきの人たちと何かちがうところがあると思うだろうか。いや、同じだよ、きみ、ソフィストと弁論家はね。あるいは、そうではないとしても、さきにぼくがポロスに言ったように、その二つのものは誓い関係にあって、ほとんど似たり寄ったりのものなのだ。ところがきみはそのことを知らないものだから、いっぽうの弁論術のほうは、何か立派なものだと考え、他方ソフィストの技術のほうはこれを軽蔑しているのだ。しかしほんとうは、ソフィストの技術のほうが弁論術よりも立派であって、それは立法術のほうが司法術よりも、また体育術が医術よりも立派であるのとちょうど同じ程度にそうなのだ」(Grg.520a-b)

ここで弁論家とソフィストとを同じ者であると言われているのは、この両者は徳を教えるべき者、あるいは徳を教えることを公言している者でありながら、そのことを果たしていないことによる(515cf.).つまり、この両者は徳の教授という点において、同じように不十分あるということである³³⁾。しかしソクラテスは、この二つの技術が完全に同じものであると言っているのではない。すぐに続けて、彼は、ポロスに語ったシェーマに言及しながら、この二つは同じものではなく、ほんとうは(τῇ ἀληθείᾳ)ソフィストの技術は弁論術よりもすぐれていることをもう一度確認している。ここでソクラテスは、二つの技術の区別を打ち消そうとしているのではなく、弁論術を称賛しソフィストを攻撃するカリクレースにたいして、その評価は無知に起因する誤りであることを指摘して、その評価を逆転させようとしているのである。

³³⁾ここでソクラテスが、弁論術とソフィストの技術が「ぼくがポロスにさっき言ったように同じである」と言っているのは誤りであり、二つの別なことがらを混同していると思われる。ソクラテスが言及している箇所は、465b-cの言葉を指していると考えられる(cf. Dodds, 367)。そこでもこの二つの技術が似ていると言われていたが、その類似性の内容は、この二つの箇所ではまったく異なる。465b-cで言われていた混同は、あきらかにソクラテスがポロスにたいしてしめした四つの技術の関係のシェーマのなかの二つのカテゴリーの混同である。

Harrison の挙げる第三の根拠は、ソクラテスがポロスにたいしてしめした四つの技術の関係のなかで、弁論術とソフィストの技術の区別が明確に説明されていないことである。彼は、それらが区別されていない理由はこのシェーマを提示したソクラテスの目的は弁論術を司法術の関係をしめすことにあって、ソフィストの技術と立法術はただ形式を整えるために導入されたにすぎないからであると推測する。しかし、その二つの技術の关系到触れられていないのは、その区別が実際に存在しないからではなく、ここでの論点に無関係であるからである。先に見たように、ソクラテスは、このあとでカリクレスを相手にして話題がソフィストのことに触れたとき、ふたたびこのシェーマに言及しながら、弁論家とソフィストを区別されるべきものとして提示している。そして、以下に論じるように、弁論術とソフィストの技術の具体的な差異は、『ゴルギアス』全体の議論から十分に読み取ることができると思われる。

もしプラトンは弁論術とソフィストの技術を区別していないという Harrison の主張が正しいのなら、自らを弁論家と規定していることはゴルギアスがソフィストではないことをしめしているという Dodds の主張は成り立たなくなるだろう。しかし、以上のように、プラトンは弁論術とソフィストの技術を一貫して厳格に区別していることは疑いえない。わたしは、この問題を考えるには、プラトンの視点とゴルギアスの視点を厳格に区別しなければならないと考える。四つの技術の関係のシェーマを知っているのは、ソクラテスだけであることを見た。そして、ゴルギアスが自分を弁論家と規定したときには、ソクラテスはまだこのシェーマを語っていなかったのであり、ゴルギアスがそれを念頭に置いて弁論家と名乗ったということはあるにない。だとすれば、どういう意味でゴルギアスが自分のことを弁論家であると言ったとしても、このことをソクラテスが語ったシェーマと重ね合わせて、プラトンがゴルギアスをソフィストと見なしていなかったという結論を導くことはできないことになる。ゴルギアス本人が弁論家と名乗ったこととプラトンがゴルギアスをどのように見なしているかということは独立させて考えなければならない。すなわち、プラトンは彼独自の基準によってゴルギアスがソフィストであるか否かを判定することができるのである。

プラトンにとってゴルギアスがどちらの種類の人間であるのかということの基準を、この四つの技術のシェーマのなかに求めることができる。『ゴルギアス』のなかでソフィストの技術と弁論術は一貫して別なものとして扱われていることを見た。この二つの技術のちがいは、Harrison の言う通り、かならずしも明確に説明されていないけれども、その差異の内容は『ゴルギアス』全体の議論から見て取ることができる。弁論術とソフィストの技術はそれぞれ偽の司法術と偽の立法術と呼ばれるべきものであり、後者は前者よりも、立法術が司法術に、体育術が医術にたち優っているのと同じ分だけ、立派であると言われている。しかし、この比喻の具体的に意味するところは、その有名さに比して、

一般に十分に理解されていないと思われる。プラトンが弁論術を偽の司法術とした理由は容易に推し量ることができる。プラトンは、ここで言葉のある特殊な使用法を弁論術と呼んでいると思われる。当時、法廷における弁論の技術が発達し、それにかんするハンドブックのようなものが流布していたことが知られている。そこで述べられているような言葉の使用法は、その内容の発達とともに、法廷以外の場所でも見られるようになった。しかし、それはもともと法廷の技術として成立したのであり、また、それがもっとも効力をあらわすのは、依然として法廷においてであったはずである。プラトンの目には、それはことからの真実を省みないでただ人を説得することだけを目指すものであり、きわめて不誠実なものに映った。弁論術がこのような種類の言葉の使用法であるならば、それを偽の司法術と呼ぶことはきわめて自然である。

ソフィストと呼ばれている人々は、この技術のもっとも熟達した使い手であった。プラトンが一般には裁判の論争術に長けた者としての狭義の弁論家とソフィストとが混同されていると言っているのは、この事実によるとと思われる。しかし、ソフィストが自分の仕事として掲げることは、法廷において論争することにとどまらないより積極的なものである。ソフィストの技術が立法術に対応するものとされる理由は、二つあると思われる。その一つは、政治にたいするプラトン独特の考え方によるものである。ソフィストにかんしてプラトンがもっとも問題視したのは、彼らの徳を教授するという主張であった。プラトンによれば、まさにこの徳を授けるという仕事こそ、政治のなすべきもっとも重要な仕事にほかならない。この考え方は、ソクラテスの「きみは国家の政治の仕事にたずさわることになった場合、われわれ市民ができるだけすぐれた者になるようにすること以外に、何か気をくばることがあるのだろうか」という言葉にはっきりとあらわれている (*Grg.*515c)。それと対比するかたちで、ソクラテスがソフィストのことを「人々を徳に向けて教育する」と公言し (*Grg.*519c-e)、さらに「国家の先頭になって、指導し、国家ができるだけよくなるように配慮している」 (*Grg.*520a) と主張している人々として彼らを攻撃していることに注意しなければならない。プラトンから見れば、彼らの教育の内容はけっして真の教育に値しないものであった。そういう意味においてソフィストの術は偽の立法術と呼ぶことができるのである。

このことに加えて、ソフィストの技術が立法術に例えられるもう一つの理由があったと思われる。それは、ソフィストと呼ばれている人たちはさまざまな仕方で積極的に政治的活動にかかわっていたという事実である。たとえばプロタゴラスは、ペリクレスに請われて、アテーナイの植民都市トゥーリオイの法律を起草するという仕事に携わっているのである。ヒッピアスやプロディコスといった者たちも、彼らの祖国の外交使節として活発な政治的活動を行っていたことが伝わっている。以上のような区別のなかでゴルギアスが弁論家とソフィストのどちらに区別されるべき者であるのかはすでにあきらかであると思われ

る。彼の活動は、弁論家として分類されるにはあまりにも積極的である。前章において、ゴルギアス自身は徳を教えることを否定していたにもかかわらず、ほかのソフィストたちが徳の教師であるのと同じ意味において、彼もまた徳の教師であることを見た。さらに、あとで論じるように、ゴルギアスの実際の政治家としての活動の華々しさは隠れのないものであった。プラトンにとって彼が典型的なソフィスト的な人物であったことは疑いえない。

III ゴルギアスの自己規定

ゴルギアスが「弁論家 (ῥήτωρ)」と名乗ったことは、プラトンのゴルギアス観とは独立して解釈されなければならないことを見た。しかし、ゴルギアスが弁論家と名乗ったことは彼の自己認識のあり方をしめしているがゆえに、別の意味で重要である。彼はどのようなつもりで弁論家と名乗ったのだろうか。ῥήτωρという言葉は、基本的には、言論の能力にすぐれた者を意味する。そしてこのことから、(a) 言論の能力を他人に教える教師、(b) 議会や法廷でその能力を行使する政治家、という二つのより限定された意味が生じた³⁴⁾。現実には同一の人物がこの両方の活動にかかわることがあるとしても、この二つの活動は概念的には区別することができる。Dodds と Harrison は、両者とも一致して、ῥήτωρ という語にはこのような二つの意味があることを認めたうえで、ここでゴルギアスが自らをῥήτωρ と規定したのは (a) の意味においてであると考えている。このことにもとづいて、Dodds は、ゴルギアスは言論の教師という意味における弁論家であり、ソフィストではないと結論づけた³⁵⁾。それにたいして、Harrison は、ゴルギアスが自分のことをῥήτωρ であると言っているのは、ソフィストであることを「純粹に機能の点から」規定したのであって、そのことは、ゴルギアスがソフィストであることを否定していることにはならないと主張するのである³⁶⁾。しかし、わたしはゴルギアスが自分をῥήτωρ と規定したのは、(a) の意味ではなく (b) の意味においてであると考ええる。

Kennedy は、ῥήτωρ という語について次のように述べている。「古典期ギリ

³⁴⁾ Dodds, 194; Harrison, 191–92.

³⁵⁾ Dodds, 194: “Gorgias is called a rhetor primarily as one knows theory of rhetoric; but the term was more often applied to those who practiced public speaking, especially in the assembly, and so came to mean virtually “politician”, as it does at 466d1, etc.”

³⁶⁾ Harrison, 191–92: “Essentially he (the rhetor) is a man in the art of rhetoric; and he may impart this skill to others, or excise it in the assembly or in the law-courts. It is of course the first of these alternatives that interests us here: for the sophist qualifies for the title of rhetor in this sense should one choose to describe him in purely functional terms.”

シャにおいては、 $\rho\eta\tau\omega\rho$ とは公的な場所で話す者一般を意味するが、とくに公的な集会で指導的な役割を果たしたり、法廷で活動する者を指す。ローマ期になると、 $\rho\eta\tau\omega\rho$ は『レトリシャン』、『レトリックの教師』という意味で用いられるようになる³⁷⁾。いまここで重要なのは、 $\rho\eta\tau\omega\rho$ という語は古典期ギリシャにおいてはレトリックの教師という意味では使われないという指摘である。Cole もこの事実をよりはっきりと述べている。「($\rho\eta\tau\omega\rho$ という語について)『レトリシャン』、『雄弁術の教師』という意味での使用法は、ヘレニズム期まで発見することはできない。」³⁸⁾ Kennedy や Cole の指摘が正しいならば、ゴルギアスであれプラトンであれ、 $\rho\eta\tau\omega\rho$ という語をレトリックの教師という意味で用いることはありえないはずである。

実際、プラトンのこの言葉の使用法を見ると、 $\rho\eta\tau\omega\rho$ と呼ばれる者にエッセンシャルであることがらは、人前で実際に話すということにあると思われる。『ソクラテスの弁明』で、ソクラテスは、法廷で話すことは彼にとって初めてのことであるにもかかわらず、そういう立場に立たされた自分のことを $\rho\eta\tau\omega\rho$ と呼んでいる (Ap.18a)。また『エウテュデモス』においては、実際に法廷に出ないでもっぱら法廷弁論を書くことに携わる者（一般に $\lambda\omicron\gamma\omicron\gamma\rho\acute{\alpha}\phi\omicron\varsigma$ と呼ばれる者と考えられる）と対比するかたちで、実際に法廷において言論を闘わせる者が $\rho\eta\tau\omega\rho$ と呼ばれ、それにたいして前者は $\rho\eta\tau\omega\rho$ ではないとされている (Euthyd. 305b-c)。 $\rho\eta\tau\omega\rho$ という語にかならずこのような意味合いが含まれるならば、私的な教師というあり方の者がこの呼び方で呼ばれることは不自然である。

『ゴルギアス』においても、ゴルギアスのあとを受けてソクラテスと会話を続けるポロスとカリクレースは、 $\rho\eta\tau\omega\rho$ という語を政治家を指すものとして用いている。ポロスは「弁論家たちは、その国のなかでもっとも力のない者であると思われる」 (Grg.466b) というソクラテスの言葉を受けて、「しかし、彼らはちょうど潜主たち ($\tau\acute{\upsilon}\rho\alpha\nu\nu\omicron\iota$) がするように、誰であろうと死刑にしたいと思う人を死刑にするし、またこれと思う人の財産を没収したり、国家から追放したりするのではないですか」 (466b-c) と反論する。Dodds は、ポロスがここで $\rho\eta\tau\omega\rho$ という語を政治家という意味で用いていることを指摘している³⁹⁾。実際、ここでポロスが語っているのは、言論の能力を用いて恣意的な権力をふるう人間であって、けっしてたんなる弁論術の教師ではありえない。このあとのカリクレースとソクラテスの会話においては、 $\rho\eta\tau\omega\rho$ という語がそういう意味で使われていることがよりクリアである。先に引用したソクラテスの言葉をふたたび掲げる。

³⁷⁾ Kennedy, 35 n. 32.

³⁸⁾ Cole, 159 n. 1.

³⁹⁾ Cf. Dodds, 194.

ソクラテス「それでは、あの先の人たち、つまり国家の先頭にたって指導し、国家ができるだけよくなるように配慮しながら、場合によっては逆にその国家をいちばん悪い国だと非難する人たちについては、きみはいったい何と言うだろうか。この人たちは、あのさきの人たちと何かちがうところがあると思うだろうか。いや、同じだよ、きみ、ソフィストとῥήτωρ はね。あるいは、そうではないとしても、さきにぼくがポロスに言ったように、その二つのものは誓い関係にあって、ほとんど似たり寄ったりのものなのだ。」(Grg.520a)

ここで「国家の先頭にたって指導し、国家ができるだけよくなるように配慮しながら、場合によっては逆にその国家をいちばん悪い国だと非難する人たち」とされるῥήτωρ とは、具体的には、この直前(518e-519c)でソクラテスが説明したような種類の現実の政治家のことを指している。そして、この言葉のなかで「弁論家とソフィスト」と一組にして言われている人々は、この直前では「政治家と称している連中とソフィスト」という言い方で呼ばれていた(Grg.519c2-3)。さらにこの直後に、この両者はふたたび、「大衆演説家(δημηγόροι)とソフィスト」(520b4)と言い換えられている。ここでῥήτωρ という語が現実の政治家を指す言葉として用いられていることは疑いえない。Dodds は、ポロスとカリクレースがῥήτωρ という言葉をこのような意味で用いていることを認めて、弁論術の教師という意味でこの語を使っている(とDoddsが考える)ゴルギアスとのあいだに、意味の移行があることを指摘している⁴⁰⁾。しかし、ポロスやカリクレースがῥήτωρ という語を政治家という意味で使っているならば、ゴルギアスがさきだって自らをῥήτωρ と規定した際にも、この言葉はやはりその意味で言われていたのではないかと考えるのが自然ではないだろうか。つまり、ゴルギアスがῥήτωρ であると名乗ったのは、それによって「自分は政治家である」ということを言おうとしたと考えられるのである。

Dodds も Harrison もゴルギアスの言うῥήτωρ の意味を弁論術の教師という意味で解釈する根拠を明確に述べていない。その理由は、ゴルギアスが自分の所有する技術を「弁論術(ῥητορικὴ)」であると言い、その技術を弟子たちに教えることによって報酬を得ていたという事実にあると思われる。一般にわれわれは、「弁論術」という言葉から(とくにそれが「レトリック」と言われるとき)、言われていることがらの内容から切り離された言葉の修辞というものを思い浮かべる。もしゴルギアスがこのような技術を教える者であるならば、ゴルギアスがῥήτωρ と名乗ったことの意味をレトリックの教師という意味で理解することはきわめて自然である。しかし、この「弁論術」という言葉にあらためて目を

⁴⁰⁾ Dodds, 232: "Polus' question marks the transition from the professional teachers of rhetoric to their pupils, the ῥήτορες, and so to the problem of power politics which is the second main themes of the dialogue."

向ける必要がある。最近、二人の論者が古典期ギリシャの「弁論術 (ῥητορικὴ)」という概念について注目すべき議論を展開している。Cole と Schiappa は、それぞれが互いに独立して、われわれが通常考える意味での「レトリック」という概念——内容と切り離して考えることのできる言葉の修辞という意味でのレトリック——は、プラトンの創出によるものであり、プラトン以前にはそういう意味でのレトリックというものは存在しなかったという主張をしている。そのなかで、この両者は一致して、そもそも ῥητορικὴ という語自体がプラトンによって案出されたものであり、古代ギリシャにおいてこの語が初めて使用されたのは『ゴルギアス』のなかのソクラテスとゴルギアスの会話においてであることを指摘している⁴¹⁾。彼らの主張は非常に説得力のあるものであると思われる。このことは、以下のような仕方であれわれの議論にかかわってくる。もしこの言葉がプラトンによってこの箇所ではじめて導入されたものであるならば、ゴルギアスがプラトンによって自分の技術を ῥητορικὴ と呼ばされたとき、その言葉は固定した概念を指すのではなく、ゴルギアスはたんに「ῥήτωρ の技術」ほどの意味で使われているのではないかと考えられる。プラトンの弁論術の概念は、ソクラテスとゴルギアス以下の登場人物との問答の結果、抽出されるものであることに注意しなければならない。だとすれば、ゴルギアスが最初に自分の技術を ῥητορικὴ と呼んだときの意味は、ῥήτωρ という語の意味に完全に依存していることになる。ゴルギアスにとって ῥήτωρ という語が政治家を意味するのならば、ῥητορικὴ という語が意味することは、純粋な言葉の技術ではなく、政治家の技術というべきものであると考えるべきではないだろうか。

実際、ゴルギアスは、ῥητορικὴ をまさにそういうものとして説明していると思われる。ゴルギアスとソクラテスの問答は、ソクラテスの誘導によって進められ、その結果として ῥητορικὴ の正体が暴露されるという仕方で行われているので、ゴルギアスが自分の ῥητορικὴ を積極的に説明することは封じ込められている。しかし、この問答のなかに、少ないながらも、ῥητορικὴ にたいするゴルギアスのオリジナルな考えを読みとることができる。ゴルギアスは、ソクラテスから「ῥητορικὴ とは、言論の使用が大きな部分を占めるような技術の一つであるとしても、そういう技術はほかにもいろいろあるのですから、言論の領域においてもとくに何にかんして権威をもつ技術が ῥητορικὴ であるのか」(451a) とたずねられて、最終的に、ῥητορικὴ によって実現されることがらを、「法廷では裁判官を、政務審議会ではその議員たちを、またその他およそ市民の集会である限りのどんな集会においてでも、人々を説得する能力」(452e) と説明している。つまり、ゴルギアスの ῥητορικὴ とは、対象及び目的を限定しないニュートラルな言葉の技術ではなく、政治家にとって必須のそしてもっとも有効な技術として提示されているのである。弁論家の技術 (弁論術) がこのような性質

⁴¹⁾ Cole, 2; Schiappa, 457–470.

の技術であるならば、その技術の持ち主である弁論家とは、まず何よりも政治家を意味するはずである⁴²⁾。さらに、ゴルギアスは、自分を弁論家と規定した直後に、他の者をも弁論家にと述べている(449b)。もし弁論家という語が弁論術の教師を意味しているのならば、ゴルギアスがここで言っていることは弁論術の教師を再生産するということになるが、そのようなことはありえないだろう。

ゴルギアスがこのような意味において弁論家と名乗ることは、けっして不可解なことではない。ゴルギアスは、アテーナイ人ではないがゆえに、アテーナイで実際に政治に関与することはできず、私的な教師として活動するしかなかったはずであり、だとすれば、ゴルギアスが自分のことを政治家という意味で弁論家と名乗ることはありえないという反論があるかもしれない。しかし、先にも述べたように、ソフィストと呼ばれる人々は、私的な教師であるのみならず、実際に政治的な活動にかかわっていたのである。ゴルギアスの場合も例外ではない。彼が最初にアテーナイに姿を現したのは、紀元前427年、彼の祖国レオンティーノイの危機を救うために施設としてアテーナイに赴き、アテーナイの人々の前で祖国への救援を請う演説をおこなったときである⁴³⁾。このときの彼の演説はアテーナイの人々に少なからぬ衝撃を与え、アテーナイは彼の要請に応じて、シシリー島に艦隊を派遣したのである。さらにゴルギアスは、オリュンピアやデルポイの祭日においても演説をしたことが伝えられている⁴⁴⁾。とくに前者においては、彼は人々にギリシャ人相互の和平を説いたことが報告されている。ゴルギアスは、*ρήτωρ* と名乗ることによって、自分のもつ言論の教師と政治的活動にたずさわる者という二つの側面のうち、後者の側面を全面に押しだそうをしていたと考えられる。このことは、ゴルギアスが言論の技術に長けた者であることを否定しているわけではない。彼自身、そのことにきわめて意識的であり、ほかの人々から見てもまず目につくのは彼の言論の能力であったことは疑いえない。しかし、このことは彼の自己認識とは別の問題である。言論の能力に通じていることは、ゴルギアスの政治家としての最大のストロングポ

⁴²⁾ さきに引用した『メノン』の箇所では、ゴルギアスが自分の仕事を「ただ人を言論に秀でたものにする」(95c)と述べていたことは、ゴルギアスが自分のことを端的に弁論術の教師であると考えていたことをしめしているように見える。しかし、すでに見たように、ゴルギアスのこの発言の意図は、徳の教師であることを公言しているソフィストたちから自分を区別することにある。ほかのソフィストたちは、この主張ゆえに世間から批判的な目で見られていた。ゴルギアスはこのような批判を避けるために、ほかのソフィストのように徳を教えるという曖昧な主張をすることを避けたのである。「ただ人を言論に秀でた者にする」という言葉の意図は、政治的な成功のためにもっとも有効な武器となる言論の技術を教授するということであると考えるべきである。

⁴³⁾ Diodorus Siculus, XII, 53, 3 (=DK82A4).

⁴⁴⁾ Philostratos, I, 9, 4 (=DK82A1).

イントである。彼が言論の役割を強調し、その点にかんする自分の能力を世間に対して強くアピールしようとしたのはむしろ当然である。

ゴルギアスが *ῥήτωρ* と名乗ったことには、彼が徳を教えることを否定したのと同様の背景があると想像される。「徳を教授する」というスローガンとともに、「ソフィスト」という語自体も、紀元前5世紀後半においては、価値的にニュートラルな語ではなく、悪い意味を担うようになっていた⁴⁵⁾。この呼び名で呼ばれることは、誹謗中傷されることと変わりがなかったのである。それゆえ、自分がソフィストと呼ばれる可能性がある者は、このような悪評にたいして何らかの方策をたてる必要があったと思われる。その一つの方法はプロタゴラスが採った方法である。プロタゴラスは、自らがソフィストであることを認めたいうえで、世間におけるソフィストにたいする悪評は誤解にもとづくものであることをあきらかにして、その誤解を解こうとした (*Prt.*316dff.)。それにたいして、ゴルギアスは、プロタゴラスとはまた別の方法を採用したのであると考えられる。「ソフィスト」という語は曖昧なものであり、それによって誰が指し示されるかということは必ずしも明確ではなかった。この事実はゴルギアスにプロタゴラスとは違った戦略を採ることを可能にした。つまり彼はソフィストであることを認めることを意識的に避けて、ソフィスト一般に向けられた反感が自分にも向けられることを回避しようとしたと考えられる。『ゴルギアス』においても、それ以外の対話篇においても、ゴルギアス自身は一度も自分のことをソフィストと言っていないことは注目に値する。『プロタゴラス』の会話がおこなわれたときには、すでにソフィストという語がすでに悪名であったことが示唆されているが⁴⁶⁾、それよりも時代の下る『ゴルギアス』の年代には、ソフィストにたいする風当たりはいっそう強いものになっていたと想像される。このような状況において、ゴルギアスがソフィストと見られることを意識的に避けようとしたのは、十分に理由のあることであると思われる。

もしゴルギアスがソフィストであるならば、カリクレースがソフィストのことを「価値のない連中」と呼び、彼らにたいして過剰とも思える反感をあらわにしていることは、ゴルギアスと近い関係にあるはずのカリクレースがソフィストであるゴルギアスを目の前にしてこのような言辞を吐くことは不自然であるがゆえに、読者を困惑させる (*Grg.*519e)。Dodds は、このことをゴルギアスがソフィストではないことの根拠の一つとして挙げている。この奇妙さの謎をとく鍵は、ゴルギアス自身の態度にあると思われる。つまり、カリクレースのこのような態度は、自分を一般にソフィストと呼ばれている人たちとは別の種類の人間に見せようとしていたゴルギアス自身の態度が反映されたものではないだろう。ゴルギアスの徳を教えないという主張は、われわれにたいしてと同

⁴⁵⁾ Cf. Sidgwick, 291ff.

⁴⁶⁾ *Prt.*312a.

様に、当時の人々にとっても彼がソフィストとは別の種類の人間であるという印象を与えたにちがいない。メノンの言うように、ゴルギアスがこのような主張をする者たちを「笑った」ということが事実であるならば、それは自分をソフィストたちから切り放そうとする態度があらわれたものであると考えられる。そして、ソフィストを攻撃するカリクレースの言葉も、ゴルギアスのこのような態度が彼と近いカリクレースの態度にも影響を与えたことによるものであると推測できる。(この箇所ではソフィストが「徳に向けて教育すると人々に主張している人々」(519e7-8) という仕方と言及されていることに注意しなければならない。)

最後に、Dodds が指摘するもう一つの根拠——ゴルギアスが『プロタゴラス』の‘Great Congress’に登場しないこと——に触れることにする。このことは、プラトンがゴルギアスをソフィストと見なしていないことをしめす根拠にはならない。なぜなら、この論点は言われてみればそうかもしれないというくらいのもので、ほかの仕方でも容易に説明することができるからである。まず考えられるのは、Harrison も指摘しているクロノロジーの問題である⁴⁷⁾。ゴルギアスがアテネに初めて登場し、その演説によってセンセーションを巻き起こしたのは紀元前427年のことである。一方、『プロタゴラス』の舞台の設定年代は紀元前433年か432年と推定されている。これらのことが正しいとすれば、ゴルギアスが『プロタゴラス』の場面に出席することは歴史的にありえないことになる。プラトンが対話篇の場面設定においてよくアナクロニズムを犯すということをわざわざ盾にして、ゴルギアスが『プロタゴラス』に登場しないことは、ゴルギアスがソフィストではないことを示唆していると考えよりも、ゴルギアスがこの場面に出席することが歴史的に不可能であったからであると考えのほうがより自然である。しかし、わたしはこの問題について次のように考えたい。以上の考察において、プラトンはゴルギアスをソフィストと見なしているけれども、ゴルギアス自身は自分のことをソフィストとは考えていないということをしめた。それが正しいとした場合、はたしてゴルギアスはプロタゴラス、ヒッピ阿斯、プロディコスといった典型的なソフィストたちが集まっている場にこのこと出かけていったのだろうか。自分をソフィストではないと考えていたゴルギアスは、ほかのソフィストと混同されるような行為を極力避けたはずであり、このような場に出席したとは考えにくい。プラトンは、ゴルギアスをソフィストと見なしていたけれども、作品にリアリティーをもたせるために、ゴルギアスのこのような態度を尊重して、『プロタゴラス』にゴルギアスを登場させなかったと考えることができる。このどちらの説明が正しいにせよ、ゴルギアスが『プロタゴラス』に登場しないというだけでは、プラトンが彼をソフィストと見なしていないことの根拠としては、いかにも脆弱である。

⁴⁷⁾ Harrison, 185-86.

参照文献

- Adam, J. & Adam, A.M., *Plato Protagoras*, Cambridge, 1893.
Bluck, R.S., *Plato's Meno*, Cambridge, 1961.
Cole, T., *The Origin of Rhetoric in Ancient Greece*, John Hopkins University Press, 1991.
Dodds, E.R., *Plato Gorgias*, a revised text with commentary, Oxford, 1956.
Grote[1], G., *History of Greece*, London, 1850.
Grote[2], G., *Plato and the other companions of Socrates*, London, 1875.
Guthrie[1], W.K.C., *A History of Greek Philosophy* Vol. 3, Cambridge, 1969.
Guthrie[2], W.K.C., *A History of Greek Philosophy* Vol. 4, Cambridge, 1975.
Harrison, E.L., 'Was Gorgias a Sophist?,' *Phoenix* 18(1967), 27–39.
Irwin, T., *Plato Gorgias*, Oxford, 1979.
Jaeger, W., *Paideia* 1, translated by G. Highet, Oxford, 1939.
Kennedy, G.A., *Aristotle On Rhetoric*, Oxford, 1991.
Kerferd, G.B., *The Sophistic Movement*, Cambridge, 1981.
Pohlenz, M., *Aus Platos Werdezeit*, Berlin, 1913.
Raeder, H., 'Plato und die Sophisten,' *Proceedings of Royal Academy (Filo. Medd. Dan. Vid. Selsk.)*, 1939.
Robinson, J.M., 'On Gorgias,' in Lee E.N. et alii(edd.), *Exegesis and Argument. Studies in Ancient Greek Philosophy Presented to Gregory Vlastos, Phronesis Supple. 1*, Assen, 1973, 49–60.
Schiappa, E., 'Did Plato Coin Rhetoric?,' *American Journal of Philology* 111(1990), 457–470. この論文は, Schiappa, *Protagoras and Logos*, South Carolina, 1991(39–63) に改訂されて収録されている。
Sidgwick, H., 'The Sophists,' *Journal of Philology* 4 (1872), 288–307.
Taylor, A.E., *Plato The Man and his Work*, London, 1926.
Untersteiner, M., *The sophists*, translated by K. Freeman, London, 1957.
田中 美知太郎, 『ソフィスト』, 東京, 1941.

なお、ゴルギアスにかんする証言は、Diels, H. and Kranz, W. [DK], *Die Fragmente der Vorsokratiker*, 6th ed., Berlin, 1951–2 による。